

認知症患者の通所サービス導入に向けて訪問看護の介入

施設名：あざい訪問看護ステーション

発表者：安藤貴子（看護師）

共同発表者：久保田亜紀、笹岡真由美、西室愛子

はじめに

認知症高齢者には通所サービスが必要と考えても受け入れられない人が多い。その理由は彼らが新しい人間関係作りが苦手であるためと考え、なじみの関係を獲得した訪問看護師が、少人数で利用できるグループホームを選び、そこでの人間関係作りを手伝い、彼らがデイサービスを受け入れられるよう働きかけ、それなりの成果を得たので発表する。

A氏の状態

夫と子供夫婦の4人家族。若夫婦は敷地内の別棟で生活し日中は老夫婦で過ごす。家から外に出ることはなく家族以外の人との交流は訪問看護師以外はほとんどない。夫や息子に対し不満が募ると日中に夫としばしば喧嘩をしたりジスキネジア、頻尿などの症状が出る。しかし夫を頼ってもいる。活動性は少なく洗濯、食事作り以外は座っていることが多い。

作戦

訪問看護時に散歩など家から外に出かけることが当たり前となるよう働きかける。次にデイサービスと一緒に参加できる相手を探す。今回はA氏の夫と子供の元先生という組み合わせを選んだ。場所はグループホームを選択。参加者が一人でも入居者がおり対応が可能、たまたま併設施設あり協力が得られやすい。時間は3時間という短時間とした。そして安心できるよう顔見知りの看護師を配置する。送迎は訪問看護師が行い、人や環境に慣れたらグループホーム職員に移行していく。

具体的行動

訪問看護をデイサービス日に設定し誘い出しに挑戦、最初のひと月は1回成功しただけ。体がえらいとか、喧嘩の際中でそれどころでなかったりしたが、その気になった時にはいつでも参加できる体制をとり続けた。夫だけの参加、夫を家に置いての参加などあり、

2ヶ月目に入り、一度は「行かない」と言うが夫の行く支度を一緒にしているうちに出かける気持ちとなり参加したことをきっかけに毎回参加するようになった。デイサービスのレクリエーションは数回の参加で完成する作品作りや料理などそれぞれのレベルにあわせて毎回達成感が得られるもの考えた。参加後にはデイでの快の印象をA氏の記憶に残すようアプローチをするよう努めた。

3ヶ月目には出かけるための着替えを準備されており気持ちの上では行く準備ができるようになってきた。この時点で送迎はデイスタッフにゆだねることとし、先に訪問看護を提供し送迎にバトンタッチをすることにした。参加は継続し、習慣化されるようになった。写真は入居者とデイ利用者とは話をしている様子。

考察

認知症の症状が出現し始めた人に共通することは記憶力低下を中心とした認知機能の低下による社会適応に対する不安を持っていることである。そのような方にとって初めての環境は抵抗があって当然である。彼らは人間関係が成立した訪問看護師とであれば外出することから、私たちが関わることで彼らの通所サービスに対する不安を減らし、日常的に外出できるようにすることを目的に関わった。その目的達成には約3ヶ月かかった。成功のカギはなじみの関係づくりを少人数から創り上げ少しずつ広げていったこと、その人の特徴を知っている看護師が計画をしたことにあるのだと思う。

今回は、①夫婦とその子供の元先生という人間関係がもともと成立をしている3人を一つの単位として連れ出したこと。②場所をグループホームに設定し、そこでの生活になじんでいる入居者との関わりを徐々に広げたこと。③看護師はそこでも関わり続け、役割を少しずつ移譲した。一方この関わりでは、保険請求は認められず訪問看護師はボランティアとして動き、収入の保障は充分ではなかった。

まとめ

通所サービスを嫌がる認知症患者に、訪問看護師がなじみの関係を少しずつ広げることで、通

所サービスを受け入れてもらうように取り組んだ。その際、本人の持つなじみの関係、訪問看護師が作ったなじみの関係、グループホームのデイサービスという小規模の環境が有効であった。今後費用負担の面で検討が必要である。